

# *The Purple Land* における女性たち

## Women in *The Purple Land*

佐 藤 幸 正

Yukimasa Satoh

W. H. Hudson が処女作 *The Purple Land that England Lost* を2巻本（初版）として発表したのは1885年であった。これには *Travels and Adventures in the Banda Oriental, South America* と副題を付したためか、ある文芸雑誌などは “Travels and Geography”<sup>1</sup> という見出しを付けて論評する有様で、どこかの旅行記や地理書扱いにする始末であった。同年11月14日の *Saturday Review* では “Never was so absolute a misnomer given to a book. *The Purple Land* is no record of genuine travel performed by a real traveller, but a very silly story of the imaginary adventures of an imaginary Mr. Lamb, . . . . We feel bound to say that we have seldom been called upon to express an opinion on a more vulgar farrago of repulsive nonsense than is contained in the volumes to which the author has given so misleading a title.”<sup>2</sup> と酷評され、惨憺たるものであった。その他の誌紙においても芳しい書評は得られず、売れ行きも悪かったのであるが、A. H. Keane 教授だけは1886年1月23日の *Academy* で、“Whether real or fictitious, the scenes and characters are described with surprising vigour and vivacity. So uniformly truthful is the local colouring, so easy and natural the dialogue, so seldom are the limits of the strictly credible overstepped, that it really becomes a matter of secondary consideration whether we have here a story of actual experience, or merely a series of graphic pictures portraying an interesting historical period in the social and political life of the turbulent Spanish American States.”<sup>3</sup> と、好意的な批評をしているのである。実際作者が *Purple Land* 即ち *Banda Oriental* に旅をしたか否かは別として、地方色豊かに、また人物を生々と描写していることは事実である。上記の批評は彼にはよほど嬉しかったとみえ、1920年2月28日付の Morley Roberts 宛の手紙に、“I had a great regard for him. When my very first book came out and *The Saturday Review* and *Athenaeum* jumped on it as a farrago of indecent nonsense and lies, Keane wrote a glowingly favourable review in *The Academy*. The first taste of praise I ever had.”<sup>4</sup> と記している。この作品はその後、一部改作されたり削除されて、現

在流布している形式を整えたのは1904年の第2版においてであった。本稿においてはこの処女作に登場する女性たちの中から、幾人かの代表的な女性を選び、以後の作品に登場する女性たちと比較しながら、その特徴を描出し、あわせて作者の女性観を考察してみたいと思うのである。

## I

この作品はアルゼンチンに育ったイギリス人、即ち主人公 Richard Lamb の24歳後半から29歳にかけて起きた事件を扱ったものであるが、就中24歳から25歳にかけての彼の恋愛及び結婚時代が中心をなしている。彼はアルゼンチン娘 Paquita と相思相愛の仲になるのだが、彼女の父親の意に反して結婚したため、その国に居れなくなり、隣国ウルグワイ即ちバンダ・オリエンタルへ駆落する。隣国の首都モンテヴィデオへ渡った二人は先ず生計を立てる必要上、ラムは妻を彼女の伯母の元に預け、自分は職を求めて国内を馬上で北上し、何ヶ月も旅を続ける。首都出立後、彼はいろいろな人事に遭遇しながら帰還するのであるが、この間の冒険談がこの作品のストーリーを構成しているのである。

彼が首都で適当な仕事を得ることができたならば、何も国中を探し回ることもなく、諸事件に遭遇することもなかったであろう。しかし、当時のウルグワイの国内情勢からすれば、仕事に就くことは決して容易なことではなかった。この作品の背景をなしているのは1860年代後半から1870年代初頭にかけてのバンダ・オリエンタルである。バンダ・オリエンタルとは “Eastern Shore” of the Uruguay River、即ちウルグワイ河の「東岸」を意味し、大体現在のウルグワイに相当する。この国は幾多の苦難を経て1828年に独立を宣言するが、その後も内乱が絶えず、国内は帽子に赤リボンを付けたコロラド党 (the Colorado Party) と白リボンを付けたブランコ党 (the Blanco Party) の二大勢力に分れて相争うのである。1843年頃ブランコ党の指導者 Manuel Oribe がアルゼンチンの独裁者 Juan Manuel de Rosas (1793—1877) の援護を受けて、仇敵コロラド党の指導者 Fructuoso Rivera の本拠地モンテヴィデオを包囲する。これが本文中で “ten years’ siege of Montevideo”<sup>5</sup> と呼ばれている両党による首都攻防戦なのである。この攻防戦は緩やかなものであったが、アルゼンチンの独裁者ローザスを撃破したいと願うフランスとイギリス、それにイタリアの愛国者 Giuseppe Garibaldi (1807—82) がコロラド党に味方したために長期戦となった。しかし、1851年にはモンテヴィデオの包囲が解除され、その翌年にはローザスも打倒されて大勢が判明した。長年に渡った両党の戦争は、この年の8月に条約が締結され、終りを告げたのである。しかし、これでウルグワイの政情が安定したわけではなく、1852年か

ら1872年までの20年間はますます悲惨な状態になっていった。アルゼンチンがこの国の支配権を得ようと干渉してくると、ブラジルがこれに対抗してきたためである。ブランコ党はその背後にアルゼンチンの、他方コロラド党はブラジルの援助を得て相争ったため、国内は戦場化していった。その後はリヴェラの後継者となったコロラド党の Venancio Flores が1865年にアルゼンチン及びブラジルの支持を取りつけることに成功し、コロラド党による政権を樹立する。この間ウルグワイは対パラグワイ戦争（Brazil-Argentine war against Paraguay, 1864—70）に巻き込まれ、ブラジル及びアルゼンチンに強要されて参戦するが、勝利を得る。これ以後ウルグワイは隣国の干渉を次第に排除してゆくのである。<sup>6</sup>

ラムとパキタが隣国の首都モンテヴィデオへ逃避行した時期はこのようにコロラド党政権樹立後のことではあるが、一方ブランコ党の不平分子は良き指導を戴き、隙あらば再起を図ろうとしていた。ラムがやっと Paysandú 州で牧夫の仕事を得るが、仲間喧嘩をして辞め、首都へ南下途中、共和制下の兵士たちに逮捕され、強制的に連行された事件は、互に新兵を補充し、勢力を拡大しようと目論む両党の意向を物語っているのである。こういう次第で、両党とも国内の逃亡者や潜伏中の罪人を捜し回り、見つけ次第、有無を言わず味方の陣営に引き入れていた。ラムと旅の道連れとなった Marcos という男、実はブランコ党の指導者 Santa Coloma 将軍が、道中突然現われたコロラド党の兵士たちに捕えられ、地方の裁判所へ護送された事件はこのような国内事情を念頭におかないと理解できないのである。

## II

作者が好んで用いる題材のなかに、地方に住む少女や娘がある。 *Green Mansions* における妖精のような少女 Rima は Orinco 河上流の密林に住み、“Marta Riquelme” における Marta もまた、外界との交通が遮断されたアルゼンチンの Jujuy 州という辺境の地に住む娘であった。このように文明から完全に鎖された所に住む女性としては *Crystal Age* における Yoletta もこの部類に入れることができる。これらは人間界から遠く隔たった特殊な地域に住む女性として描かれた例であるが、他方彼は多くのエッセイの中で、旅先の村や田園でふと出会った女性たちを登場させるのである。この作品でもウルグワイのパンパス（pampas）に散在する牧畜業を営むガウチョ（gaucho）の家、即ちランチョ（rancho）に立ち寄ったラムが、そこで見かけ、心惹かれた女性たちを数多く登場させている。しかもそのなかには以後の作品に登場する女性と密接な関連があると推測される女性も含まれているのである。

ラムはやっとのことで得た牧童の仕事を仲間喧嘩のため辞して、首都への帰路、一夜の宿を求めてある小奇麗なランチョに立ち寄る。そしてその回廊近くに生えている美しい老枝垂柳の下に立つ乙女の姿を見て感動し、次のように描写している。

Never had I beheld anything so exquisitely beautiful. It was not that kind of beauty so common in these countries, which bursts upon you like the sudden south-west wind called *pampero*, almost knocking the breath out of your body, then passing as suddenly away, leaving you with hair ruffled up and mouth full of dust. Its influence was more like that of the spring wind, which blows softly, scarcely fanning your cheek, yet infusing through all your system a delicious magical sensation like—like nothing else in earth or heaven. She was, I fancy, about fourteen years old, slender and graceful in figure, and with a marvellously clear white skin, on which this bright Oriental sun had not painted one freckle. Her features were, I think, the most perfect I have ever seen in any human being, and her golden brown hair hung in two heavy braids behind, almost to her knees. As I approached, she looked up to me out of sweet, grey-blue eyes, there was a bashful smile on her lips, but she did not move or speak. On the willow branch over her head were two young doves; they were, it appeared, her pets, unable yet to fly, and she had placed them there. The little things had crept up just beyond her reach, and she was trying to get them by pulling the branch down towards her.<sup>7</sup>

彼女は Margarita という名のこの家の娘であるが、丁度リマが森林で小鳥と戯れていた場面を思わせるように、鳩と遊んでいたこの光景に、ラムはしばらく我を忘れて見蕩れ、生涯忘れ得ぬほど心惹かれたのである。彼女の特徴を拾ってみると、年齢14歳頃の申し分のない容貌をした娘である。年齢に関して他の作品と比較してみると、リマの場合17歳、マルタの場合も当初は15歳の娘として登場し、それぞれに最高級の賛辞を呈していることを考えれば、作者は恐らく15歳前後の女性を最も美しい理想の女性とみなしていたように思える。次に、その姿が「ほっそりして優美」という表現も、彼の描く女主人公に共通して見られる条件で、リマなどはその典型的な例に数えられる。髪は“golden brown”とあり、リマの場合と色こそ異なるが、膝まで達する長い髪を二条に編み、後方に垂れている髪形は同形である。目は“grey blue”で皮膚は白く美しい。性質や性格面に言及すれば、“a bashful smile”と記しているように、彼の描くヒロインには慎ましく、恥らいを浮か

べた、控え目な女性が多い。彼は知的で都会的な感覚や趣味を持つ女性よりも、荒野に咲く花のような純真な田園の娘を好み、自然と共に遊び、草花や小鳥を愛する乙女を対象にする。

このような女性観は彼の理想とする生活、及び人生観と密接な関係をもっている。彼は牧畜業を営むこの一家の生活に理想郷を見出し、ラムに次のように言わせている。

How sweet was this primitive simplicity of mind! Here, doubtless, was the one spot on the wide earth where the golden age still lingered, appearing like the last beams of the setting sun touching some prominent spot, when elsewhere all things are in shadow. Ah, why had fate led me into this sweet Arcadia, since I must presently leave it to go back to the dull world of toil and strife . . . . Had it not been for the thought of Paquita waiting for me over there in Montevideo I could have said, "O good friend Sweet Potato, and good friends all, let me remain for ever with you under this roof, sharing your simple pleasures, and, wishing for nothing better, forget that great crowded world where all men are striving to conquer nature and death and to win fortune, until, having wasted their miserable lives in their vain endeavours, they drop down and the earth is shovelled over them!"<sup>8</sup>

上記は複雑な、機械化された都市生活よりも、長閑かな自然とともに暮らす田園生活を理想とする彼の信条を吐露したものである。都会とは彼に言わせれば "that great crowded world where all men are striving to conquer nature and death and to win fortune, until, having wasted their miserable lives in their vain endeavours, they drop down and the earth is shovelled over them!" であり、自然を征服しようと無駄な努力をし、果は空しく死んでゆく大雑踏の世界なのである。彼は都会での物憂げな、疲れ切った、怠惰な生活よりも、野良に出て自分の手で働き、顔に汗してパンを食べる生活を評価するのであるが、同趣旨のことは次作、*A Crystal Age* (1887) においても繰り返し主張されるのである。<sup>9</sup>  
*A Shepherd's Life* (1910) において牧畜業に携わる素朴な人々を描き、また *Birds and Man* (1901) において南英の自然の中で好きな鳥類を観察し、森の風、その風の精霊に耳を傾ける態度を示しているのも、<sup>10</sup> 結局は田園生活や自然の中での生活に意義を見出す彼の人生観に基づくものである。このような人生観は彼が生育したパンパスでの長年の経験によって自然に養われていたのであり、渡英(1874年)後のロンドン生活を経て確固たるものとなった。本作品で彼が古代ギリシャ以来のアーケイディア志向を色濃く反映させた

り、あるいは都会の貴婦人ではなく、片田舎でふと出会った娘を描く時に特異な才能を発揮するのも、このような人生観の具現化に他ならない。マルガリータの場合もその例外ではなく、主人公が旅の途中で偶然に出会った田舎娘に魅了されたわけであるが、彼女は一体どんな素性の娘であったか次に述べよう。

### Ⅲ

彼女の祖父 Basilio de la Barca はスペイン貴族の血をひいており、若い頃は大変美男子でモンテヴィデオの社交界の花形であった。祖先は広大な土地を所有していたが、この国の長年の戦争によって彼の代には破産寸前になっていた。彼は社交や娯楽を好み、美男子であるが故に人々の賞賛の的になっていた人であるが、それによって身を持ち崩すようなことはなく、純真で謙虚な気持を失わなかった。人望の厚い人だったにもかかわらず、どういう理由か晩婚で、40歳頃になってやっとある年輩の婦人と結婚し、それ以後は社交を離れ、海岸近くに退いて僅かばかりの家畜とともに余生を送っていた。やがて彼等の間に生まれたのが Transita という子供で、後年マルガリータの母となるのだが、特にこれと言った教育を施すことはせず、自然に任せて自由に育てる。彼等はまた、書物を忘れて百姓同様の生活を楽しむのであった。自然とともに素朴な遊びに明け暮れして成長するトランシタの日常の様子は次の一節によく示されている。

Transita spent her childhood in rambling over the dunes on that lonely coast, with only wild flowers, birds, and the ocean waves for playmates. One day, her age being then about eleven, she was at her usual pastimes, her golden hair blowing in the wind, her short dress and bare legs wet with the spray, chasing the waves as they retired, or flying with merry shouts from them as they hurried back towards the shore, flinging a cloud of foam over her retreating form, when a youth, a boy of fifteen, rode up and saw her there.<sup>11</sup>

“a boy of fifteen” というのはブランコ党の指導者としてコロラド軍と一戦を交えることになる後のサンタ・コロマ将軍のことで、彼女を始めて見たこの当時はまだ15歳の少年だった。トランシタは11歳位の金髪の少女として登場するのであるが、他人の顔を見るのも稀な淋しい環境で育てられ、遊び相手として野の花、鳥、海の波を唯一の友として過す姿は、リマが人里離れた森林に住み、動物や自然物を友として過した姿によく似ている。

サンタ・コロマ少年がこの時受けた彼女の印象をもう少し引用しよう。

This child, playing with the waves, was like nothing I had seen before. I regarded her not as a mere human creature; she seemed more like some being from I know not what far-off celestial region who had strayed to earth, just as a bird of white and azure plumage and unknown to our woods, sometimes appears, blown hither from a distant tropical country or island, filling those who see it with wonder and delight. Imagine if you can, Margarita with her shining hair loose to the winds, swift and graceful in her motions as the waves she plays with, her sapphire eyes sparkling like sunlight on the waters, the tender tints of the sea-shell in her ever-changing countenance, with a laughter that seems to echo the wild melody of the sandpiper's note. Margarita has inherited the form, not the spirit, of the child Transita. She is an exquisite statue endowed with life. Transita, with lines equally graceful and colours just as perfect, had caught the spirit of the wind and sunshine and was all freedom, motion, fire — a being half-human, half-angelic.<sup>12</sup>

トランシタを “some being from I know not what far-off celestial region who had strayed to earth” あるいは “a being half-human, half-angelic” と述べ、天国からでも迷い込んだ神聖な女性として描いていることは注目に値する。作者が女性を神聖視することはリマ及びその母にも当て嵌めることであり、作者の女性観を示す一特徴だからである。Nuflo 一味により、Riolama 山中で発見されたリマの母は “her head was surrounded by an aureole like that of a saint in a picture, only more beautiful”<sup>13</sup> と表現され、後光に包まれた彼女の姿を聖者と信じるヌフロ老人のこの言葉は、作者が女性を神聖視するもう一つの例である。若くして母を失った作者は *Far Away and Long Ago* (1918) において、母の思い出を語るのであるが、敬愛の念をこめてその母性愛を思慕し、賛美している。この母性愛賛美もまた、女性神聖視と同様、ハドソンの女性観を知る上で記憶さるべきことであろう。

トランシタは “a bird of white and azure plumage” と珍鳥に譬えられているのであるが、女性を鳥類のみならず、自然物や自然現象に譬えるのはハドソンの特徴である。トランシタのようにその姿全体が珍鳥に譬えられている例は、リマがあゝ劇的な最期を遂げる場面で “through leaves and smoke and flame it fell like a great white bird killed with an arrow and falling to the earth, and fell into the flames beneath”<sup>14</sup> と、大きな

白い鳥が地上の炎の中に落下してゆくて姿に譬えられているのに類似している。しかも両者の場合における鳥は普通のありふれた鳥ではなく、美しい神聖な鳥に譬えられているため、読者に一層美しく、不思議なイメージを与えることに成功している。これは、博物学者として長年の観察を通じて修得した鳥類に関する豊富な知識や習性を女性に投影させることによって、一種特異な女性像を創造するハドソン独自の技法と言えるであろう。

引用文中の“swift and graceful in her motions”及び“her ever-changing countenance”もまた注目すべき語句である。まず、動作が敏捷で優雅な点について言うならば、*Crystal Age* のヨレッタが Smith を伴って付近の丘に登る時の驚くべき軽快な身のこなしに<sup>15</sup>、あるいはリマが Abel を伴ってジャングルを蝶かハミング・バードのように見え隠れしながら神秘的に歩く物腰に具象化されてゆくのである。絶えず変化する顔の表情についても同様で、リマについて述べた次の一節によって、処女作以後の筆力の進展ぶりが窺えるのである。

All the ever-varying expressions—inquisitive, petulant troubled, shy, frolicsome—had now vanished from the still face, and the look was inward and full of a strange, exquisite light, as if some new happiness or hope had touched her spirit.<sup>17</sup>

トランシタに関してもう一つ忘れてならないのは、彼女が“the sprit of the wind and sunshine”の持主だということである。自然界の美しきもの、即ち“wind”や“sunshine”等の集合体としての女性を、作者はすでにこの処女作において創造しているのである。後年、*Green Mansions* において彼はリマを“All the separate and fragmentary beauty and melody and graceful motion found scattered throughout nature were concentrated and harmoniously combined in her.”<sup>18</sup>と表現し、断片的に散在している自然界のあらゆる美が彼女に集約され、結合された姿として創造しているからである。従って彼女の神秘的な美しさ、微妙に変化する体色、鳥のメロディのような声等は、読者に不思議な感情を抱かせるのであるが、自然美の結晶として解釈することによって始めて理解される筈のものである。マルガリータやトランシタは諸点においてリマに類似しているのであるが、彼女たちはリマへ到達する前段階的な存在にすぎない。即ち、リマという総合的女性美への断片的な存在、彼女へ到達する粗描的段階に留まっている女性たちと言えるのである。

トランシタが14歳なるのを待ってサンタ・コロマは愛の心を打ち明けるが、すぐ彼は兵役にとられ、3年後に戻ってみると彼女の父バシリオは死んでおり、彼女は母と共にモンテヴィディオに戻った後だった。その母もやがて死に、彼女は外国人に引き取られ、彼がやっと回り合えた時には死が近づいていた。その時彼に語ったところによると、17歳の



時 Andrada という裕福な男と愛情のない結婚をさせられ、一児を儲けるが、彼に捨てられてしまったというのである。その時の子供がマルガリータで当時2、3歳であった。彼女はサンタ・コロマに昔の好誼からマルガリータをどこか遠くの百姓に預け、百姓の子供として育ててほしいと頼むのであった。その百姓家がラムが一夜を求めた Batata 家であり、その庭で見た娘がマルガリータということになるのである。

#### IV

Batata 家のもう一人の来客マルコス・マルコという50歳位の男、実はサンタ・コロマ將軍、と共にこの家を後にしたラムは一路首都へ向った。しかし道中、二人共コロラド党共和国下の騎馬巡査に捕えられ、拘留される事件に遭遇したり、その後一人旅を続けたラムは森の中で乗馬を盗まれる災難に出会ったりしながら、やっと辿り着いた所は Yí 河付近の、あるガウチョの家であった。主人は Alday といい、サンタ・コロマの熱烈な信奉者で彼を救国主と仰ぎ、彼を擁立してコロラド党政権打倒の意気に燃えている男である。丁度そこへ同志がやって来て、“Santa Coloma, the hope of Uruguay, the saviour of his country, who will shortly deliver us out of the power of Colorado assassins and pirates—Santa Coloma has come! He is here in our midst; he has seized on El Molino del Yí, and has raised the standard of revolt against the infamous government of Montevideo! *Viva Santa Coloma!*”<sup>19</sup>と、將軍がコロラド党政権打倒のために立ち上がったことを報じたため、この家は大騒ぎになる。Alday 家には16歳頃の Monica という娘と Anita という7、8歳の女の子がいたのであるが、この時の二人の様子は次のように記されている。

Monica, silent, pale, almost apathetic, was occupied serving maté to the numerous guests; while the child, when the shouting and excitement was at its height, appeared greatly terrified, and clung to Alday's wife, trembling and crying piteously. No notice was taken of the poor little thing, and at length she crept away into a corner to conceal herself behind a faggot of wood. Her hiding-place was close to my seat, and after a little coaxing I induced her to leave it and come to me. She was a most forlorn little thing, with a white, thin face and large, dark, pathetic eyes. her mean little cotton frock only reached to her knees, and her little legs and feet were bare. Her age was seven or eight; she was an orphan,

and Alday's wife, having no children of her own, was bringing her up, or rather permitting her to grow up under her roof. I drew her to me, and tried to soothe her tremors and get her to talk. Little by little she gained confidence, and began to reply to my question ; then I learnt that she was a little shepherdess, although so young, and spent most of the time every day in following the flock about on her pony. Her pony and the girl Monica, who was some relation—cousin, the child called her—were the two beings she seemed to have the greatest affection for.<sup>20</sup>

モニカの方は年長者らしく、喧噪の最中にあっても冷静な態度で同志にマテ茶をサービスしているのであるが、彼女の特徴を挙げてみると、“large, dark eyes”, “a quiet, bashful girl”, “pale face”, “a profusion of black hair”, “slender, graceful form” とあり、<sup>21</sup> 外見的にも性格的にもマルガリータやトランシータにおいて見たと同じような特徴を兼備し、大体同タイプの女性とみなすことができる。他方、the child とあるのは Anita のことであり、これまで見てきた女性と比較すれば年齢が7, 8歳とかなり低い。もっとも作者は女の子の年齢と魅力との関係について、“It is true that when little girls become self-conscious they lose their charm, or the best part of it ; they are at their best as a rule from five to seven, after which begins a slow, almost imperceptible decline (or evolution, if you like) until the change is complete.”<sup>22</sup> と述べていることからすれば、彼は5歳から7歳前後の女の子にも興味を示し、よく観察していることがわかるのである。アニタについては “a white, thin face”, “large, dark, pathetic eyes” とあり、また粗末な衣服に裸足というのがその外見上の特徴となっている。彼女はモニカの落ち着いた態度と対照的に、この騒ぎに戦っているのであるが、孤児としてこの家に育てられていること、羊の世話をさせられていることから判断すれば、内容的には “El Ombú” の Monica によく似ており、その原型になっているのではないかと思われる。“El Ombú” におけるモニカは Sanchez というギャンブル好きの父親に捨てられ、孤児になるのであるが、彼女もやはり羊飼の世話をさせられ、冬の寒い日に羊の後を追いかける幼気な様子は次のように記されている。

In winter it was cruel, for then the sheep travel most, and most of all on cold, rough days ; and she without a dog to help her, barefooted on the thistle-grown land, often in terror at the sight of cattle, would be compelled to spend the whole day out of doors. More than once on a winter evening in bad weather

I have found her trying to drive the sheep home in the face of the rain, crying with misery. It hurt me all the more because she had a pretty face : no person could fail to see its beauty, though she was in rags and her black hair in a tangle, like the mane of a horse that has been feeding among the burrs. At such times I have taken her up on my saddle and driven her flock home for her, and have said to myself : “Poor lamb without a mother, if you were mine I would seat you on the horns of the moon ; but, unhappy one! he whom you call father is without compassion.”<sup>23</sup>

彼女の場合もアニタ同様粗末な衣服を纏い、裸足で羊の群を一日中追いかけているのである。年齢も恐らく同じ位であろうし、体も痩せて “pathetic eyes” をしている女の子と想像される。“El Ombú” におけるモニカについては、アニタの場合のように一挿話として終ることなく、その後の生活が継続して記述されている。即ち、モニカは Donata という未亡人に我が子同然に育てられ、やがてドナタの一人息子で父の仇討に行った Bruno の帰宅を待ち侘びる娘へと成長する。しかし、ブルーノ青年は不幸にも返討にあい、その悲報に接した彼女は悲しみのあまり、気違いになってしまう物語になっている。アニタの場合はこのように纏まった物語として完結するのではなく、同情を誘う純真な孤児の域を出るものではない。ただし、彼女の断片的な記述にもかかわらず、小さき者に愛情を示し、哀れな者に同情を寄せる作者の態度はその意向を十分に伝えている。

## V

処女作に登場する数多くの女性の中から三人選び、それぞれの特徴とそれぞれが以後の作品でどのように発展して行くのか論じてきたのであるが、次いで人物描写と作品構成との関係について触れてみよう。というのはトランシタはともかく、マルガリータ及びアニタの場合、その後の消息がどのように展開されて行くのか知りたくても、記述されていないからである。このことは他の女性、例えばサンタ・コロマ將軍を救国主と仰ぎ、情熱的で愛国心の強い Dolores にも、更には憂えを秘めたペラルタ家の娘 Demetria にも言い得ることである。なぜそのような結果に終わっているのかと言えば、物語構成の性格にその原因があると思われる。即ち、物語そのものが連続性のあるものではなく、各独立した挿話が連結して構成されているため、一挿話内において登場人物をその生涯に渡って描写したり、掘り下げたりする余裕のないまま終わってしまうためである。その結果、挿話間相互

の統一にも欠けることになり、Haymaker が指摘する “The looseness of its structure”<sup>24</sup>を生じる原因となっている。作者が主人公の視点を通じて、バンダ・オリエンタル地方の舞台を順次移動させ、まるでその土地の絵巻物を展開するように風物や人事をリアルに表現する手法からすれば、その着想段階から「構造の弛緩」という問題を孕んでいたと言わざるを得ない。この点、同じく旅行の形式をとりながら、大森林を舞台の中心に固定し、女主人公を終始一貫して追求した *Green Mansions* の構造とは異なるのである。しかし、物語構成上の欠点にもかかわらず、Morley Roberts が “But in *The Purple Land* he shines in character”<sup>25</sup> と賞賛するだけあって、人物描写が際立っているため、断片的ではあるが、人物の特徴は明確に把握できる。従って、リマの性格面やヨレッタの機敏な動作に着目するならば、そこにトランソタの面影が重なり合って見え、また幼気な美少女モニカが羊の群を追いかける姿を思い浮かべるならば、容易にアニタの姿が想像されてくるのである。つまり、処女作におけるこれらの女性像は以後の作品にも継承され、そこで始めて完成された姿を見るのである。

本作品の女性たちはその生活環境として、一様にバンダ・オリエンタルという田園牧歌的な自然の中に設定されている。そこに住む彼女たちは現代文明に毒されることなく、またそれによって造られた人工的な美しさを秘めた女性でもない。機械化された大都会から遠く掛け離れた田園にあって、粗末な衣服を纏ってはいるが、荒野に咲く花のように健康で自然な美を湛えた女性である。彼女たちは、イギリス人の主人公が本国とは異なり、階級の隔てなく自由に交際できたバンダ・オリエンタルの女性、即ち謙譲と優雅な物腰を天性とする美しい心の持主たちであった。作者はなぜこのような自然環境と女性像を創造するのかと言えば、彼が生育したパンパスでの体験や、それとは対蹠的な渡英後のロンドン生活から得た人生観によることは想像に難くない。彼がロンドンで見たものは、かつては自然が何人にも平等に与えてくれた人生の喜びや心の晴れやかさが、今や自然が人間に征服され、奴隷化された結果、それが消えてしまった姿であった。彼は言う。

O civilisation, with your million conventions, soul-and-body-withering prudishnesses, vain education for the little ones, going to church in best black clothes, unnatural craving for cleanliness, feverish striving after comforts that bring no comfort to the heart, are you a mistake altogether?... Ah yes, we are all vainly seeking after happiness in the wrong way. It was with us once and ours, but we despised it, for it was only the old common happiness which Nature gives to all her children, and we went away from it in search of another grander kind of happiness which some dreamer — Bacon or another — assured us we should find.

We had only to conquer Nature, find out her secrets, make her our obedient slave, then the earth would be Eden, and every man Adam and every woman Eve. We are still marching bravely on, conquering Nature, but how weary and sad we are getting! The old joy in life and gaiety of heart have vanished, though we do sometimes pause for a few moments in our long forced march to watch the labours of some pale mechanician seeking after perpetual motion and indulge in a little, dry, cackling laugh at his expense.<sup>26</sup>

アルゼンチンの広大な自然に囲まれて育った彼が、当時の産業の中心地ロンドンへ渡った時、文明という名のもとに自然が破壊され、物質的繁栄のために人心までが荒廃してゆく姿を見て、このような考えを抱いたとしても何ら不思議なことではない。イギリスがいかに超文化的な状態の中にあっても、精神の望む糧を与えることができなければ、彼は本能を満足させることができなかったのである。本作品でバンダ・オリエンタルを描くことによって、彼は人間の精神面を忘れ物質偏重に走る当時の世相に抗し、自然に帰れと主張しているのである。このような思想の持主であり、また生来の野外博物学者であるが故に、彼が大自然の中に舞台を設定し、その風物や人事を描写するのはごく自然なことであったと言っても過言ではあるまい。

#### Notes

- 1 W. H. Hudson, "Preface to the New Edition," *The Purple Land* in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1922), p. v.
- 2 John R. Payne, *W. H. Hudson: A Bibliography* (Kent & Hamden: Dawson & Archon, 1977), p. 13.
- 3 *Ibid.*, p. 14.
- 4 *Ibid.*, p. 13.
- 5 Hudson, *The Purple Land*, p. 366.
- 6 M[ilton] I. V[anger], "History," under Uruguay, *Encyclopaedia Britannica*, 1970.
- 7 Hudson, *The purple Land*, pp. 71—72.
- 8 *Ibid.*, pp. 74—75.
- 9 W. H. Hudson, *A Crystal Age*, in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1922), p. 114.
- 10 W. H. Hudson, *Birds and Man* (New York and Bombay: Longmans, Green, and Co., 1901), p. 214.
- 11 Hudson, *The Purple Land*, pp. 171—72.
- 12 *Ibid.*, pp. 172—73.
- 13 W. H. Hudson, *Green Mansions*, in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), p. 213.
- 14 *Ibid.*, p. 276.

- 15 Hudson, *A Crystal Age*, p. 116.
- 16 Hudson, *Green Mansions*, p. 109.
- 17 *Ibid.*, p. 122.
- 18 *Ibid.*, p. 132.
- 19 Hudson, *The Purple Land*, p. 134.
- 20 *Ibid.*, pp. 136—37.
- 21 *Ibid.*, pp. 132—33.
- 22 Hudson, *A Traveller in Little Things*, in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), p. 134.
- 23 Hudson, “El Ombú,” *El Ombú and Other South American Stories*, in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), pp. 35—36.
- 24 Richard E. Haymaker, *From Pampas to Hedgerows and Downs: A Study of W. H. Hudson* (New York: Bookman Associates, 1954), p. 321.
- 25 Morley Roberts, *W. H. Hudson: A Portrait* (London: Eveleigh Nash & Grayson Ltd., 1924), p. 104.
- 26 Hudson, *The Purple Land*, pp. 261—62.

(論文提出 54.10.12日)